

## つながりを生み出す図工ワークショップの実践と考察Ⅳ

——2022年度の実践を中心に——

佐 伯 育 郎\*

Art Workshops to Forming Connection with Someone IV: Focusing on Art Workshops in 2022

Ikuo SAEKI\*

### はじめに

筆者は、図画工作専修・ゼミの学生（以下、ゼミ学生）<sup>註1）</sup>との協働によって図工ワークショップを毎年企画・実施している<sup>註2）</sup>。図工ワークショップの根底にあるテーマは「架橋（つながり）」である。2019年度までは学内で行うことが主であった図工ワークショップであったが、近年は学外での実践が中心となっている。学外における図工ワークショップについて省察し、取組を通して生み出すことができた様々なつながりについて言及してきた。

本稿では、2022年度（令和4年度）に行われた広島市祇園西公民館（祇園集会所）、5-Days こども文化科学館、広島市南観音公民館の計3回の学外・図工ワークショップの実践に関する省察をもとに、どのような成果と課題が生まれたのか、検証することを目的とする。読者各位の忌憚のないご批正を賜りたい。

### 1. 3つの図工ワークショップに持たせた共通点

2022年度の図工ワークショップでは、表1の共通点を持たせて実践した。三実践を比較・考

察することを意図して、実践に一貫性を持たせた。

【表1：2022年度・図工ワークショップの共通点】

5つの共通点	祇園西 公民館	こども文化 科学館	南観音 公民館
①身辺材	○	○	○
②マッピング	○	○	○
③共同制作	○	○	
④絵本活用		○	○
⑤Teaching Case 使用		○	○

まず、主材料に身辺材を用いたことが共通点として挙げられる。祇園西公民館ではトイレットペーパーの芯、5-Days こども文化科学館では段ボール、広島市南観音公民館では紙パックを主材料として使用した。ありふれた身近な材料（身辺材）を用いることは、図工ワークショップでは従来から行ってきたことであった。

2つ目の共通点としては、材料の1つとしてマッピングを施した紙を用意したことである。マッピングとは、水よりも軽い絵の具やインクをバットに張った水の水面に浮かべて、ストローで息を吹きかけたりかき混ぜたりして模様を作り出し、紙に写し取る手法である。いわゆるモダンテクニック（絵筆で直接描画する以外

\* 本学教授

の様々な表現技法。マープリングの他、スパッタリングやスクラッチなどの表現技法の総称)の一種であり、別名“墨流し”とも言う。ゼミ学生と筆者が事前に制作し、準備した。

3つ目の共通点は、参加者による個人作品を集合させることによって共同制作にもなるよう工夫したことである。ワークショップの限られた時間内で個人の作品を完成させるだけでなく、参加者による相互鑑賞の場になること、参加者に対して協働による一体感や達成感を持たせることを意識して設定した<sup>註3)</sup>。表現と鑑賞とを関連付けるとともに、個人制作で完結するのではなく少しでも協働的な活動に近付くよう意識して取り入れた。ただし、この点は南観音公民館の実践では取り入れることができなかった。

4つ目の共通点は、ワークショップの導入において絵本の読み聞かせを取り入れたことである。参加者の人数と会場の広さを考慮に入れ、絵本を持って読み聞かせをするのではなく、絵本をスキャンした画像を Microsoft PowerPoint に貼り付け、プロジェクターで会場のスクリーンに投影しながらゼミ学生が読み聞かせを行った。参加者の動機付けを促すこと、創作意欲を高めること、題材への共通認識を促すことを意図して取り入れた。ただし、祇園西公民館の実践では取り入れることができなかった。

5つ目の共通点としては、材料を分類して収納した Teaching Case の使用が挙げられる<sup>写真1)</sup>。学外でのワークショップの回数が増えたため、同じ規格の Teaching Case を複数用意し、持ち運びしやすいように改善した。ただし、Teaching Case を導入する前の祇園西公民館の実践では取り入れることができず、従来の様に異なるサイズの複数の容器に入れた材料を学外へ持ち出して使用した。容器が高張り、持ち運びが煩雑であり、管理も難しかったことから、筆者が

夏季休業中に Teaching Case を整備して、後期の授業やワークショップで活用することにした。

表以外の共通点としては、これまでの図工ワークショップなどで扱った題材とのつながりを意識し、2022年度において改善策・改良案を提示し、実践したことが挙げられる。

## 2. 公民館との架橋 ～図工ワークショップ

### ①祇園西公民館主催事業・出前講座～キッズ編「おしゃれなフクロウを作ろう！」

#### (1) 題材と概要

このワークショップは、2022年6月初旬に祇園西公民館から筆者に依頼があり、8月3日(水)において実現したものである。祇園西公民館の石原聖志館長(2021年度までは南観音公民館館長)によると、祇園西公民館の地区には広島市立の3小学校(山本小学校、祇園小学校、春日野小学校)があり、祇園西公民館は山本小学校区に位置している。山本小学校の児童には、祇園西公民館は身近な施設であるが、祇園小学校、春日野小学校の地域からは離れているため、足を運ぶ機会が少ないそうである。祇園西公民館では、祇園小学校、春日野小学校の地域に出向き、祇園小学校エリアの祇園集会所において出前講座を開催している。そこで、この度筆者らが小学生を対象として、祇園集会所を会場に出前講座(工作教室)を担当することになった<sup>資料1・写真2)</sup>。題材に関する祇園西公民館からのオーダーは、簡単工作であり、①夏休みの宿題として学校に持参できるもの、②友だちや先生にちょっぴり自慢できるもの、③夏の思い出として心と形に残るものという3点であった。この3点と比較的短い準備期間を考慮に入れ、2020年9月に安芸高田市立八千代の丘美術館で実践した題材「フクロウ」を改良して実践する



【資料1：「おしゃれなフクロウを作ろう！」の案内】

ことにした<sup>註4)</sup>。参加者独自の「フクロウ」を制作することに着目して、「おしゃれな」という修飾語を題名に入れて装飾性を強調した。

3年次前期「教育学研究Ⅲ」においてゼミ学生（3年生10人）が教材研究を行い、コンセプトを明確にした（表2の下線部が変更点）。具体的には、ゼミ学生と筆者が事前にマープリングを施した紙やオーロラカラーの折り紙（キラキラ折り紙）なども新たに用意して、よりおしゃれなフクロウになるように改善した<sup>写真3・4)</sup>。

【表2：おしゃれなフクロウのコンセプト】

1	フクロウかミミズクかを参加者に選択させる。
2	土台となる身体の部分にトイレットペーパーの芯を用いる。
3	顔や翼、尾や脚、装飾には色画用紙、マープリングを施した紙やキラキラ折り紙などを用いる。
4	吊り下げるためにモール、ダンボール片を用いる。
5	<u>ビッグアウルに吊り下げること、共同制作にもなる。</u>

筆者はMicrosoft PowerPointによるスライドショー（全51ページ）を事前に作成し、当日はプロジェクターでスクリーンに投影しながらゼミ学生が説明・進行を担当した<sup>写真5)</sup>。当日は、小学校1年生から5年生までの10人の参加者があった<sup>表3)</sup>。

【表3：「おしゃれなフクロウを作ろう！」参加者】

学年	小1	小2	小3	小4	小5
人数	2	1	3	2	2

当日のプログラムは表4の通りである。導入ではフクロウクイズを行った。フクロウが地味な配色をしている理由を参加者に考えさせ、その解答を紹介した後、おしゃれなフクロウにしてあげようと呼びかけて制作を開始した。これまでの実践と同様、制作手順を6工程に分け、参加者の様子を見ながら2工程ずつ制作を進めた。材料・用具は、本学から持参した。

【表4：「おしゃれなフクロウを作ろう！」当日プログラム】

1	はじめのごあいさつ	5分
2	今日のめあて ①フクロウが、どのようなとりか まなぼう。 ②ペーパーのしんで、フクロウをつくろう。 ③フクロウとせんせいといっしょに、しゃしんをとろう。 フクロウってどんなとり？ フクロウクイズ①～④ フクロウのつくりかた 1. フクロウかミミズク、どちらかえらぼう。 2. しんをつかって、からだをつくる。 3. いろがようしで、はねをつくる。 4. からだにはねをくっつける。 5. かおとおなかをつくる。 6. あし、モールをつけて、かんせい！ フクロウとせんせいといっしょに、しゃしんをとろう！ 記念写真の撮影（ビッグアウルといっしょに） 今日の先生・今日のまとめ	110分
3	記念写真の撮影、アンケート回答・提出	5分

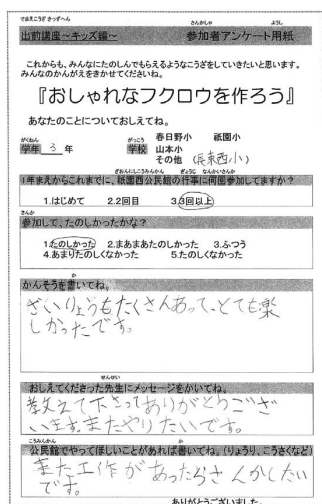
ゼミ学生による支援を受けながら、参加者は独自のおしゃれなフクロウを完成させていった<sup>写真6・9)</sup>。参加者と担当したゼミ学生の記念写真を撮った後、全員の作品をビッグアウル（灰

色のプラスチック段ボールで制作した大きなフクロウ。作品を吊り下げるためのフックが取り付けられてある）写真10-12）に集合させておしゃれに変身させて、相互鑑賞と全体記念写真の撮影を行った。撮影後は、参加者に個人の作品を持って帰って頂いた。参加者にアンケートを記入して頂いた後、ワークショップを終了した。

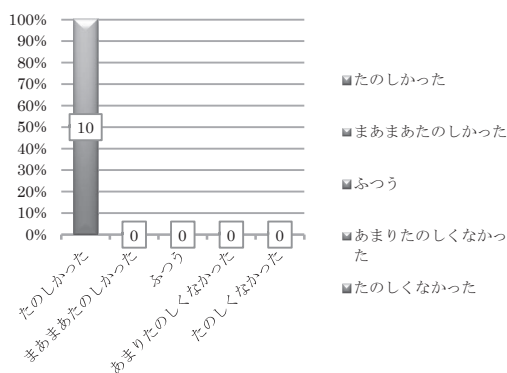
## (2) 成果と課題

参加者には、終了時に祇園西公民館が用意されたA4サイズ1枚のアンケートに回答して頂いた<sup>資料2)</sup>。ワークショップの満足度について質問した。「たのしかった まあまあたのしかった ふつう あまりたのしくなかった たのしくなかった」の5段階で回答して頂き、評価の理由も記述して頂いた。参加者10人全員の回答（回収率：100%）があり、結果はグラフ1になった。全員が「たのしかった」と回答している。

理由としては、分かりやすく優しく教えてくれた、想像以上の作品を作ることができたからという子どもによる肯定的な記述が散見された。代筆した保護者からは、先生が手取り足取り教



【資料2：「おしゃれなフクロウを作ろう！」の事後アンケート】



【グラフ1：「おしゃれなフクロウを作ろう！」満足度】

えてくださった、将来素敵な先生になられると思うといった感想もあった。全体的に高評価であった。

活動後には本学のホームページで活動報告を公開した他、祇園学区社会福祉協議会『祇園学区社協だより 第69号』（2022年12月発行、p. 4）<sup>資料 3）</sup>において活動報告を掲載して頂いた。



【資料3：「おしゃれなフクロウを作ろう！」掲載の社協だより】

3. 科学館との架橋 ～図エワークショップ  
②5-Days こども文化科学館・市民企画  
型事業「みんなでにじいろのさかなを  
つくろう！」

### (1) 題材と概要

2 回目のワークショップは、2022年10月23日

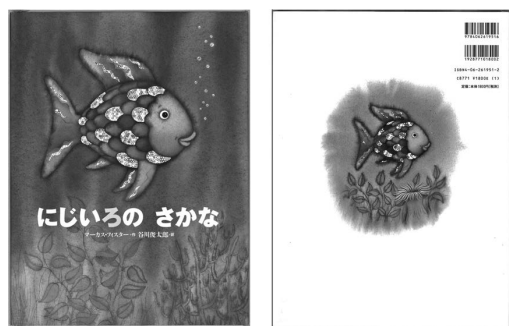


(日)に実施した「みんなでにじいろのさかなをつくろう！」である<sup>資料4)</sup>。題材開発の元となったのは、マーカス・フィスター作、谷川俊太郎訳の絵本『にじいろのさかな』(講談社、1995年)である<sup>資料5)</sup>。

ワークショップの題材としてにじいろのさかなの作品づくりを筆者が企画し、市民企画型事業として5-Days こども文化科学館に提出した結果、採用されたものである<sup>写真13)</sup>。これまでのワークショップ会場の1つであった安芸高田市立八千代の丘美術館が、2022年3月末をもって休館したため、筆者らの実践の場が一つなくなってしまった。別の場を新たに開拓する必要があり、2022年6月に5-Days こども文化科学館に筆者が見学と交渉にうかがい、今回の実践に至った。



【資料4：「みんなでにじいろのさかなをつくろう！」掲載のチラシ】



【資料5：絵本『にじいろのさかな』(講談社、1995年)】

この絵本を題材にして、以前筆者が担当していた初等教育学科の授業「保育内容演習Ⅰ」(2019年度・前期)で実践したものを今回のワークショップ用に改良していった。「保育内容演習Ⅰ」では、色画用紙を土台としてホログラム折り紙などを活用した鱗を貼り付けて学生独自のにじうおを制作したが、片面だけの作品であった<sup>写真14)</sup>。この題材を改善して、コンセプトを導き出した<sup>表5)</sup>。特に、色画用紙、マーブリングを施した紙やオーロラカラーの折り紙(キラキラ折り紙)を身体に使用するとともに、二つ折りにすることで両面の作品になるよう改善した<sup>写真15-16)</sup>。おしゃれなフクロウと同様に、全員の作品を大きなにじうお(青色のプラスチック段ボールで制作した。作品を吊り下げするためのフックが取り付けられている)<sup>写真17)</sup>に集合させておしゃれに変身させるようにした。このアイデアの元となったのは、2022年7月10日(日)の本学オープンキャンパスの教育学科初等教育専攻のイベントにおいてゼミ学生が実践した模擬保育である。この模擬保育では、絵本『にじいろのさかな』をスキャンした画像をMicrosoft PowerPointに貼り付け、プロジェクターで会場のスクリーンに投影しながらゼミ学生が読み聞かせを行った。その後、参加した高校生にオーロラカラーの折り紙を配付し、鱗に見立てた魚を折ってもらい、全員の作品を集合させて貼り付け、大きなにじうおを完成させる実践を行っ

【表5：“にじうお”のコンセプト】

1	身体には、二つ折りした色画用紙、マーブリングを施した紙やキラキラ折り紙などを用いる。
2	装飾には動眼、ビーズ、スパンコールなどを用いる。
3	吊り下げのためにモール、ダンボール片を用いる。
4	大きなにじうおに吊り下げることで、共同制作にもなる。

た写真<sup>18)</sup>。この時は完全に共同制作の一部となっていたため、参加した高校生には個人の作品を持って帰って頂くことはできなかった。

当日のプログラムは表6の通りである。会場は、5-Days こども文化科学館3階の創作室である。材料・用具はTeaching Caseを活用して本学から持参した。進行と指導は、ゼミ学生14人（2年生8人、3年生4人、4年生2人）と筆者が協働して指導・支援を行った。筆者と学生でMicrosoft PowerPointによるスライドショー（全46ページ）を事前に作成した。当日は、ゼミ学生が交替しながらMicrosoft PowerPointを用いて説明した。前半では、絵本『にじいろのさかな』の読み聞かせを行った写真<sup>19)</sup>。にじゅうおに友達を作ってあげようと参加者に投げかけた後は、制作手順を6工程に分け、参加者の様子を見ながら2工程ずつ制作を進めていった。参加希望者が定員16人を上回る40人であったため、抽選を行い、子ども16人11組に絞り込んだ（こ

れに加えて保護者も参加）。5-Days こども文化科学館の担当学芸員の方からは、幼児対象の参加プログラムが他に少なかったため、丁度ニーズに合っていたからではないかと言っていた。ほぼマンツーマンの形で指導・支援を行った写真<sup>20)</sup>。筆者は、補助指導者という位置付けで全体の援助をした。

【表7：「みんなでにじいろのさかなをつくろう！」参加者（子ども）】

年齢・学年	2歳 10ヶ月	年少	年中	年長	小1	小2	小4	小5
人数	1	2	3	3	2	2	1	2

参加者は、保護者とゼミ学生と協力しながら多彩なにじゅうおを作り上げていった写真<sup>21-23)</sup>。作品完成後、参加者とゼミ学生と全員で記念撮影をした写真<sup>24)</sup>。会場に戻り、筆者からワークショップ参加のお礼を述べて、アンケートに回答して頂いた後終了した。

【表6：「みんなでにじいろのさかなをつくろう！」当日プログラム】

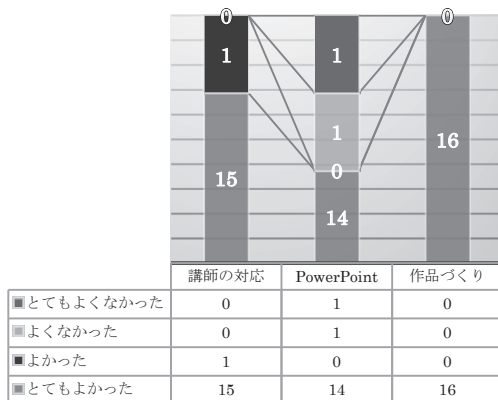
1	はじめのごあいさつ・先生のしょうかい	5分
2	絵本『にじいろのさかな』のよみきかせ 今日のめあて ①にじいろのさかなをつくろう。 ②みんなでおおきなにじゅうおをつくろう。 ③にじゅうおとせんせいといっしょに、しゃしんをとろう。 にじゅうおのつくりかた 1. からだになるかみをえらぼう。 2. かみをおって、からだをつくろう。 3. めやうろこをつけよう。 4. モールとダンボールでぶらさげよう。 5. からだをくっつけてかんせい！ 6. せんせいといっしょにしゃしんをとろう！ 全体記念写真の撮影 今日のまとめ	110分
3	おわりのごあいさつ、アンケート回答・提出	5分

## (2) 成果と課題

参加者には、終了時に筆者が用意したA4サイズ1枚のアンケートに回答して頂いた。参加者16人中16人の回答であった（回収率：100%）。まず、ワークショップの満足度について質問した。「とてもよかった よかった よくなかった とてもよくなかった」の4段階で回答して頂き、評価の理由も記述して頂いた。結果はグラフ2である。

理由としては、親切に教えてくれたから、初めに絵本を読んでくれたから今から何を作るのか明確なイメージを持つことができたからという肯定的な回答が多かった。ゼミ学生の対応、作品づくりは満足度が高かった。Microsoft PowerPointを活用し、2工程毎に説明をすれば、発達段階や年齢に幅はあっても無理なく制作でき

ることが改めて明らかになった。ゼミ学生も、14人を参加させた。特にゼミに加入して間もない2年生を9人全員投入し、Microsoft PowerPointの作成・説明も体験させた。ただし、Microsoft PowerPointを用いたスライドショーについては、会場のスクリーンによってやや見えにくかったため、評価が割れている。

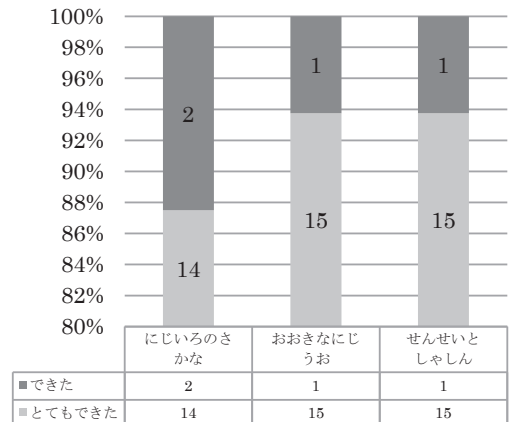


【グラフ2：「みんなでにじいろのさかなをつくろう！」の満足度】

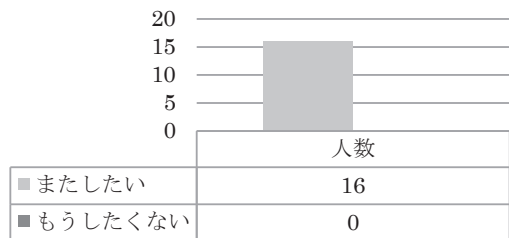
次に、めあて（ねらい）の達成度についても質問した。「とてもできた できた できなかった まったくできなかった」の4段階で回答して頂いた。回答の結果は、グラフ3になった。理由としては、子どもが意欲的に飽きることなく楽しんでいて、初めての工作だったがとても集中して作ることができたといった感想が見られた。にじうおという題材も導入で絵本の読み聞かせを行うことで、参加者への動機付けを高めやすいものであったのではないかと考える。程よい難易度の制作過程であり、幼児・児童の参加者に適していたと考えられる。

最後に、またゼミ学生と一緒に作品づくりをしたいかどうか質問した。「またしたい もうしたくない」の2択で回答して頂いた。参加者16人全員が「またしたい」と回答した。

ワークショップ終了後は、教育学研究Ⅱ・Ⅳ



【グラフ3：「にじいろのさかな」めあての達成度】



【グラフ4：「また先生と一緒に作品づくりをしたいか】

の授業で振り返りを行った。思っていた以上に子ども達が楽しんでいるように思えた、学生側も子ども達側も最初は緊張していたはずだが、作品が完成した頃には笑顔になっていて良かった、実際に子どもと関わらないと学ぶことができないことも沢山あったという肯定的な感想が多かった。学内における普段のゼミ活動と学外でのワークショップとで往還する学びを展開できた点も収穫であった。課題としては、どこまで援助していいかわからず途中で保護者の方が援助に回っていることもあったのもう少し積極的に援助ができてよかったといったゼミ学生の省察も見られた。

活動後には、本学のホームページで活動報告を公開した。学内では、学生の作品を集合させた大きなにじうおを本学の1号館2階において展示した。

#### 4. 公民館との架橋 ～ワークショップ③ 南観音公民館主催事業「げんきっず・ミニクリスマス会」

##### (1) 題材と概要

2022年12月7日（水）には、広島市南観音公民館において「なんかん子育て広場「げんきっず」」が開催された。そこで行われた「ミニクリスマス会」を筆者とゼミ学生20人（2年生8人、3年生9人、4年生3人）とで担当した資料6・7）。昨年度と同様、会場には公民館2階



【資料6：「げんきっずミニクリスマス会」の案内】



【資料7：「げんきっず」案内掲載の公民館だより2022年12月号】

の大集会室を使用した。参加者は乳幼児とその保護者が多いため、公民館の配慮で床にマットを敷いて座って活動できるようにした。作品を作ることが難しい子どものために、ゼミ学生（4年生）による手作りおもちゃを並べたコーナー、今回の題材であるケーキをテーマとした絵本コーナーも設置した。材料・用具は Teaching Case を活用して本学から持参した。

プログラムは表8の通りである。Microsoft PowerPointによるスライドショー（全76枚）の作成と操作は筆者が行ったが、ゼミ学生（3年生）が交代で進行を行った。19組36人（子ども19人、保護者17人）の参加があった表9）。公民館専門員の方によると、学生・参加者含めてこれまでで最も多い人数の開催となったという。

【表8：「ミニクリスマス会」当日プログラム】

1	はじめのごあいさつ・教員と学生の自己紹介	5分
2	パネルシアター「あわてんぼうのサンタクロース」	5分
3	サンタクロース・トナカイ登場・プレゼント配付	5分
4	絵本『ばくばくはんぶん』のよみきかせ	5分
5	クリスマス工作ワークショップ ～パッケーキ パッケーキってなに？ パッケーキのつくりかた 1. かみパックをきりひろげよう。 2. 2つのめんをさんかくにおろそう。 3. ケーキのかたちにくみたてよう。 4. いろがようしをはろう。 5. かざりをつけておいしそうにしよう。 6. おさら、フォークをつけてかんせい！ 担当学生とご家族との写真撮影、全員で記念写真	95分
5	おわりのごあいさつ、アンケート回答・提出	5分

【表9：「ミニクリスマス会」参加者】

年齢	0歳	1歳	2歳	保護者
人数	5	8	6	17



ミニクリスマス会の導入では、筆者と学生の自己紹介を行った後、ゼミ学生によるパネルシアターを見ながら、学生のピアノとギターの演奏に合わせて一緒に「あわてんぼうのサンタクロース」（作詞：吉岡治、作曲：小林亜星）を歌って頂いた。歌唱後、ゼミ学生扮するサンタクロースとトナカイがステージから現れ、プレゼント（公民館で用意して頂いたお菓子、ゼミ学生が用意したサンタクロースのミニフレーム作品）を配付した<sup>写真25</sup>。導入として、ケーキが出てくる絵本、渡辺鉄太文、南伸坊絵『ぱくぱくはんぶん』（福音館書店、2021年）の読み聞かせをゼミ学生（4年生）が行い、パッケーキ制作への動機付けを図った<sup>資料8・写真26</sup>。この絵本を選択したのは、絵本とその活用について研究しているゼミ学生（4年生）であった。絵本の登場人物たちが食べなくなる様なケーキを作ろうと参加者に投げかけた後、パッケーキ制作の手順を6工程に分け、参加者の様子を見ながら2工程ずつ制作を進めていった。パッケーキとは、紙パックを主材料としたケーキのことである。昨年度の題材トナカーは、対象となる子どもの年齢・発達に比べて高度であったという反省があった。そこで、今年度はトナカーに比べて難易度の低いパッケーキを題材として選択



【資料8：絵本『ぱくぱくはんぶん』（福音館書店、2021年）】

した。

パッケーキは、2014年度・学内での図工ワークショップの題材である<sup>註5</sup>。今回、再び題材化するにあたって作り方を改良した。以前のツブシビルドという組み立て方から改良して、クロスビルドという新しい作り方をゼミ学生と筆者によって開発した<sup>写真27</sup>。新旧の作り方を比較すると表10になる。おしゃれなフクロウやにじうおと同様、パッケーキにも色画用紙だけでなく、マープリングを施した紙やオーロラカラーの折り紙（キラキラ折り紙）を用意した<sup>表11</sup>。

参加者は、親子で、またはゼミ学生と協力しながら多様なパッケーキを作り上げていった<sup>写真28-31</sup>。

【表10：パッケーキの作り方比較表】

名称	旧：ツブシビルド	新：クロスビルド
手順	①紙パックを潰す。 ②ステープラーでとめる。 ③色画用紙を両面テープで貼る。	①紙パックをハサミで十字に切り広げる。 ②色画用紙を両面テープで貼る。 ③ステープラーでとめる。 ④色画用紙を両面テープで貼る。
利点	手順が少ない。	紙パックを潰さないため、きれいなケーキの形態になる。色画用紙の切り方が簡単。
欠点	紙パックを潰して作るため、ケーキの上面と底面が凹む。色画用紙の切り方が複雑。	手順が一工程多くなる。

筆者も子どもへの支援を中心に行った。作品が完成したら、ご家族と担当のゼミ学生とで写真撮影を行った。参加者全員で記念撮影した後、アンケートに回答・提出して頂き終了した<sup>写真32</sup>。

【表11：新パッキーのコンセプト】

1	ケーキ本体（土台）には、紙パックを用いる。
2	ケーキ本体（土台）は、クロスビルドの方法で組み立てる。
3	ケーキ本体（表面）には、色画用紙、マーブリングを施した紙などを用いる。
4	装飾には、キラキラ折り紙、ボンテン、マスキングテープ、ビーズなどを用いる。

## (2) 成果と課題

参加者には、南観音公民館が用意されたA5サイズ1枚のアンケートに回答して頂いた。参加者（保護者）19組中14組の回答であった（回収率：約74％）。

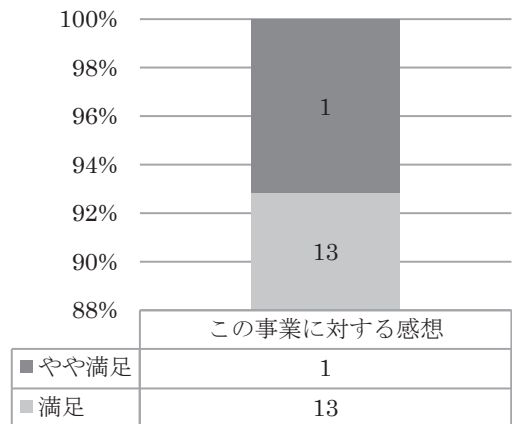
まず、今年度の南観音公民館での事業に参加したことがあるか質問した。結果はグラフ5の通りである。5組が南観音公民館でのイベントに参加した経験があることがわかった。

次に、ワークショップの満足度について質問した。「満足 やや満足 ふつう やや不満 不満」の5段階で回答して頂いた。評価の理由も記述して頂いた。結果はグラフ6の通りである。満足度は高かった。

理由としては、ケーキの作り方が簡単で家でも作れそうだから、楽しかったから、素敵な企画をありがとうございましたという回答が見られた。否定的な回答はなかった。ただ、参加した子どもたちの年齢が低かったため、パッキーの作り方を改良したもののゼミ学生や保護者が制作を手伝う場面が自ずと多くなった<sup>註6)</sup>。



【グラフ5：今年度南観音公民館での事業に参加した回数】



【グラフ6：「ミニクリスマス会」の満足度】

ワークショップ終了後、教育学研究Ⅱ・Ⅳの授業で振り返りを行った。子どもがもっと主体となって参加できるような工作のワークショップを実践してみたい、作って家に持って帰ってからも繰り返し使って遊べるようなものができたらいいと思った、幅広い年齢の子どもがくるワークショップだとしたら区画を分けてその月齢や年齢に合った作り方や材料を用意してどちらでも楽しめるといいと思ったという意見も得られた。参加者による全体的な評価は高かったが、題材選びには依然として課題が残った。今回、手作りおもちゃコーナーも好評であったため、今後はコーナー保育の要素を更に取り入れることも検討したい。児童教育コースの学生については、関わることの無い幼児との触れ合いはとても貴重な経験になった、自分の意思が伝わりにくい幼児だからこそこのように関わるのが正解なのかなど考えさせられたという感想もあった。

ミニクリスマス会終了後、南観音公民館の専門員の方より来年度も是非お願いしたいというお言葉を頂き、ゼミ学生、筆者ともに達成感と喜びを感じることができた。今後もできれば継続していきたい。

## 5. 今年度の総括・今後の課題

本稿では、2022年度（令和4年度）に行われた学外3回の図工ワークショップの実践に関する省察を行ってきた。3回ともに、感染対策を講じることで、無事実施することができたことも収穫であった。ゼミ学生については教育実習・保育実習と同様、健康管理・行動記録表などを用意して当日に備え、無事終えることができた安堵している。

取組の結果、どのようなつながりが深まったのか、筆者なりにまとめると2020・2021年度と同様に次のようになる。

### 【2022年度で深まったつながり】

#### ①大学と地域とのつながり

#### ②実践同士・ゼミ内のつながり

①については、これまで言及してきた通りである。公民館、科学館での図工ワークショップを通して、地域とのつながりを持つことができた。熊倉純子は、アートプロジェクトに関連して「教育機関との連携による若年層の多面的な関わり」と題して「アートプロジェクトの重要な担い手として注目すべき存在が、教育機関である。特に、大学が大きな役割を果たすことが多い。従来、大学に課せられていたミッションは『研究』と『教育』の2つであったが、国立大学の法人化という大きな制度改革を契機に、『地域貢献』という3つ目のミッションが加わった。そのため、地域に介入しさまざまな組織や人びとと連携を図るアートプロジェクトが、大学の授業の一環としてとり組まれるようになった。」<sup>引用1)</sup>「『地域貢献』という視点においては、地域の中に大学が積極的に出て行く契機になっている。後述のように、アートプロジェクトに地域の市民が参加し、学生たちとともに新たな創造性を学ぶことは、生涯学習の機会となって

いるとも言える。」<sup>引用2)</sup>と述べている。更に、熊倉純子は「アートプロジェクトでは、さまざまな組織や人びととの連携が生まれ、単一の主体では生まれ得なかったネットワークやノウハウ・情報が蓄積されてゆく。そのため、プロジェクトの規模や関わる人びとは年を追うごとに変化し、その状況に即した柔軟な組織形態や活動方法を追求する必要性が出てくる。このように、異業種・異分野の組織や人びとが関わり合うアートプロジェクトは、地域の既存のコミュニティを横断し、接続する、『プラットフォーム』の役割を果たしている。」<sup>引用3)</sup>とも述べている。厳密に言えば、筆者らが取り組んでいる図工ワークショップはアートプロジェクトとは異なるかもしれないが、ゼミと地域、公民館や科学館との間で相互作用が生まれている点で趣旨は共通していると筆者は考える。

②についても、これまで言及してきた通りである。3回のワークショップにも共通点・一貫性を持たせたが、完全なものとは言えなかったため今後の課題として改善していきたい。例えば、おしゃれなフクロウでもワークショップ導入における絵本の活用は取り入れることができたかもしれない<sup>註7)</sup>。パッケージも、2015年度取組のように完成後集合させて展示・鑑賞することもできただろう。一方で、過去の実践を元にして、2022年度版で改良することもできた。普段のゼミ活動と学内ワークショップとを有機的に連動させることができた。いわゆるコロナ禍であり、ゼミ学生が全員参加できたわけではないが、ゼミ内において学年を越えたつながりが生まれたと言える。

筆者は、本学においてこれまで人間科学部人間文化学科、初等教育学科で美術・図画工作を専門としたゼミの経営をしてきた。文教文化展などの展覧会での発表に向けたゼミ学生個人に

よる作品制作を中心に行ったこともあったが、教育学部教育学科に所属している現在は、ゼミ学生個人の作品制作よりも図工ワークショップや教材研究・題材開発などを中心とした図画工作・幼児造形に関する実践的研究に移行していきたいと考えており、数年前から既実践しているところである。

図工ワークショップが様々なつながり、相互作用を生み出すものと筆者は考えるため、学外機関と連携・協働しながらゼミ学生とともに無理のない範囲で地道に研究・実践を継続していきたい。

### 謝辞

学外・図工ワークショップにご参加の皆様、ご支援・ご協力くださいました広島市祇園西公民館様、5-Days こども文化科学館様、広島市南観音公民館様、教育学部教育学科、関係各位に心より感謝いたします。とりわけワークショップの機会を与えてくださり、企画・運営に協力してくださった祇園西公民館館長・石原聖志様、祇園西公民館社会指導主事・高橋由美子様、5-Days こども文化科学館主任指導主事・矢野宏和様、5-Days こども文化科学館学芸員・小出美由紀様、5-Days こども文化科学館学芸員・福永奈央様、南観音公民館館長・渡辺一浄様、南観音公民館専門員・中村百花様に深謝いたします。本当にありがとうございました。

### 参考文献

- ・新野貴則・福岡知子編著『明日の小学校教諭を目指して 子どもの資質・能力を育む 図画工作科教育法』萌文書林、令和元年
- ・内野務『造形素材にクワイ本 子どもが見つける創造回路』日本文教出版、平成28年

### 引用文献

- ・引用1) 熊倉純子監修、菊池拓児+長津結一郎『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』水曜社、2014年、p. 24
- ・引用2) 前掲書1、pp. 24-25
- ・引用3) 前掲書1、p. 26

### 註

- ・註1) 本稿では、ゼミ学生と表記した。正確には、

教育学部 教育学科 初等教育専攻 児童教育コース図画工作科教育学ゼミと幼児教育コース領域造形表現ゼミである。

- ・註2) 2020～2022年度では、2007年度から毎年行ってきた学内における図工ワークショップ(表12)は開催しなかった。

【表12：学内での図工ワークショップ一覧】

実施年度	題材〔タイプ〕 (モチーフ)	主材料にした 身辺材	主な彩色・ 装飾方法
2007	アルミアート (魚)	アルミ缶	なし
2008	ハコニマル (トナカイ)	紙パック	ラッカー スプレー
	ランパック (ランプ)		
2009	ペットカー (生物・車)	ペットボトル・ ダンボール	ビニール テープ
2010	ツリース (クリスマスツリー)	ダンボール	色画用紙
2011	でこふれ (写真立て)	ダンボール	色画用紙
2012	ダンドール 〔スタンディングタイプ・ シッティングタイプ〕 (サンタクロース)	ダンボール	色画用紙
2013	バックハウス (家)	紙パック・ ダンボール	色画用紙
2014	バックケーキ (ケーキ・スイーツ)	紙パック	色画用紙
2015	ダンドール 〔ハンギングタイプ〕 (アーティなど)	ダンボール	色画用紙
2016	バックカー (アートナカイ)	紙パック	色画用紙
2017	オシャブーツ (ブーツ・靴)	円筒状紙製 パッケージ	色画用紙
2018	シンドル・コビットモ (小人)	トイレットペー パーなどの芯	色画用紙
2019	マンネンダー (万年カレンダー)	ダンボール	色画用紙

これまでの学外・図工ワークショップをまとめると、表13になる。学内ワークショップで実践した題材を流用したり、アレンジしたりして学外で実践してきた。近年は学外での開催が主になっており、2022年度において初めて実践総数は学外ワークショップが学内ワークショップを上回った。

【表13：学外での図工ワークショップ一覧】

実施時期	題材	連携した 外部施設・団体等
2011年 8月	ペットカー	広島県立美術館
2012年 8月	アルミアート	広島県立美術館
2015年 8月	ダンドール	みよし風土記の丘 ミュージアム
2017年 8月	ダンドール	世羅町教育委員会 社会教育課
2019年 5月	カーネーション	マリーエイド・ サードテラス
2019年 8月	コビットモ (和風版)	ふくやま草戸千軒 ミュージアム
2020年 7月	ポスター	安芸高田市立 八千代の丘美術館
2020年 9月	フクロウ	安芸高田市立 八千代の丘美術館
2020年12月	ツリース (2020年度版)	安芸高田市立 八千代の丘美術館
2021年 7月	ポスター	安芸高田市立 八千代の丘美術館
2021年11月	トナカー	安芸高田市立 八千代の丘美術館
2021年12月	トナカー	広島市南観音公民館
2022年 8月	おしゃれな フクロウ	広島市祇園西公民館 (祇園集会所)
2022年10月	にじうお	5-Days 子ども文化科学館
2022年12月	パッケーキ	広島市南観音公民館

- ・ 註 3) (文部科学省『小学校学習指導要領図画工作編』、日本文教出版、平成30年、p. 108) の「第4章 指導計画の作成と内容の取扱い」では「共同してつくりだす活動」として「(5) 第2の各学年の内容の「A 表現」の指導については、適宜共同してつくりだす活動を取り上げるようにすること。」を推奨している。「共同して活動することは、様々な発想や構想、アイデア、表し方などがあることに互いに気付き、表現や鑑賞を高め合うことにつながる。活動を設定する場合には、児童の実態を考慮するとともに、児童一人一人の発想や構想や技能などが友人との交流によって一層働くようにすることが大切で

ある。特に、決められた部分を受けもつだけで活動が終わらないように留意し、児童一人一人が共に活動をつくりだしている実感がもてるように工夫することが重要である。」と述べており、今年度の図工ワークショップにおいてもこの点を考慮に入れて個人作品を集合させることによる共同制作を試みた。

- ・ 註 4) 佐伯育郎「つながりを生み出す図工ワークショップの実践と考察Ⅱ—2020年度の実践を中心に—」(『広島文教教育 第35巻』広島文教大学、令和2年、pp. 41-57) 参照のこと。安芸高田市立八千代の丘美術館でのフクロウ作りの図工ワークショップについて詳述している。
- ・ 註 5) 佐伯育郎「積極的な参加による図工ワークショップの工夫と発展性—2013年度と2014年度の取り組みを比較して—」(『広島文教教育 第29巻』広島文教女子大学、平成20年、pp. 27-36) 参照のこと。本学でのパッケーキ作りの図工ワークショップについて詳述している。新野貴則・福岡知子編著『明日の小学校教諭を目指して 子どもの資質・能力を育む図画工作科教育法』(萌文書林、令和元年) においては、筆者が立体に表す活動の例としてパッケーキ作りについて言及している (pp. 154-157)。
- ・ 註 6) 筆者は、図工ワークショップにおける指導・支援のあり方を表14のようにまとめている。図工ワークショップには、事前に子どもの実態がわかっている通常の保育・授業とは異なる難しさがある。この原則をもとに実践を進めると、参加者・指導者双方の抵抗を軽減でき、満足度も高まると考えている。ゼミ学生には、この三原則を事前に伝え、ワークショップ当日に備えた。

【表14：図工ワークショップにおける指導・支援の在り方三原則】

原則	指導・支援の具体的な方法
1	子どもにできることはさせて、できないことは手助けする。
2	予想外のことは、臨機応変に対応する。
3	同時に作品を作るなど、伝わりやすい工夫をする。

- ・ 註 7) 例えば、次の絵本が考えられる。シルベース・ペロル『ふくろうの本 (はじめての発見)』岳陽社、2007年。フィリップ・バンティング『ぼくはフクロウ』ピーエル出版、2018年。





【写真1：材料をまとめた Teaching Case】



【写真2：会場となった祇園集会所】



【写真3：「おしゃれなフクロウを作ろう！」学生の参考作品①】



【写真4：「おしゃれなフクロウを作ろう！」学生の参考作品②】



【写真5：ゼミ学生による PowerPoint を用いた説明・進行】



【写真6：「おしゃれなフクロウを作ろう！」参加者の作品①】



【写真7：「おしゃれなフクロウを作ろう！」参加者の作品②】



【写真8：「おしゃれなフクロウを作ろう！」参加者の作品③】



【写真9：「おしゃれなフクロウを作ろう！」参加者の作品④】



【写真10：参加者と担当学生との写真①】



【写真11：参加者と担当学生との写真②】



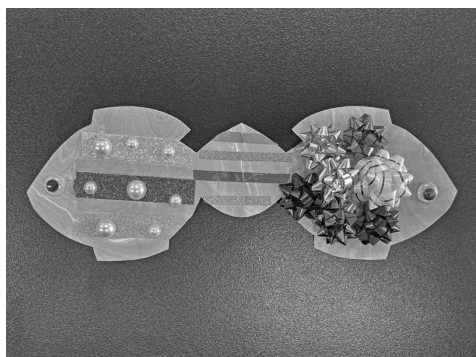
【写真12：全員の作品を集合させて完成したビッグアウル】



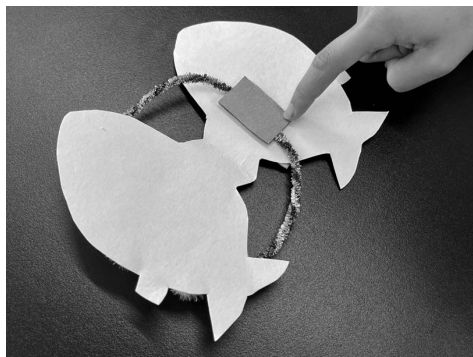
【写真13：会場となった5-Days こども文化科学館】



【写真14：改良前の“にじう”（学生・筆者の作品）】



【写真15：改良後の“にじう”（制作途中の学生作品①）】



【写真16：改良後の“にじう”（制作途中の学生作品②）】





【写真17：全員の作品を集合させて完成した大きなにじうお】



【写真18：オープンキャンパスでの大きなにじうお】



【写真19：絵本『にじいろのさかな』の読み聞かせ】



【写真20：にじうお制作中の様子】



【写真21：“にじうお”参加者と学生の作品①】



【写真22：“にじうお”参加者と学生の作品②】



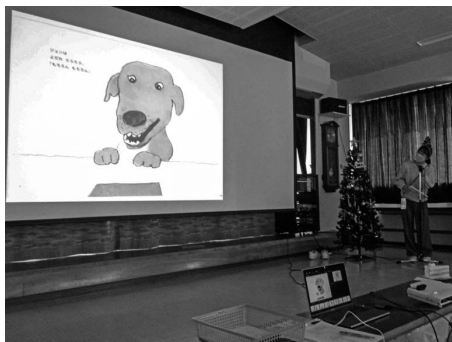
【写真23：“にじうお”参加者と学生の作品③】



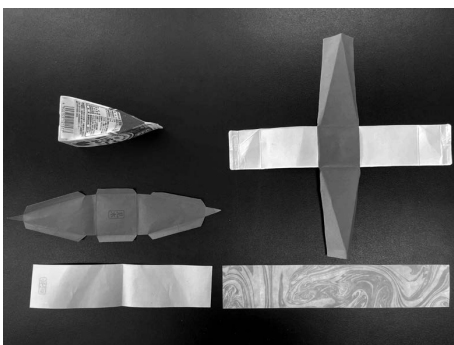
【写真24：全体記念写真】



【写真25：プレゼント「サンタクロースのミニフレーム」】



【写真26：絵本『ぱくぱくはんぶん』の読み聞かせ】



【写真27：“ツブシビルド”と“クロスビルド”】



【写真28：ゼミ学生による指導・支援の様子】



【写真29：参加者によるパッケーキ①】



【写真30：参加者によるパッケーキ②】



【写真31：参加者によるパッケーキ③】



【写真32：全体記念写真】